

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月22日現在

機関番号：10101  
 研究種目：挑戦的萌芽研究  
 研究期間：2010～2012  
 課題番号：22652013  
 研究課題名（和文） 芸術の社会機能  
 研究課題名（英文） Arts in Society  
 研究代表者 堀田 真紀子（HORITA MAKIKO）  
 北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授  
 研究者番号：90261346

研究成果の概要（和文）：サンフランシスコの対抗文化の流れをくむナウトピアの運動は、何を廃止すべきかプロテストするよりも、何をなすべきか、その代案を、直接行動で、実例提示することで示そうとする。本研究は、このナウトピアの運動を参与観察するうちに、その実践者たちが、社会を変える力を、すべての人に内在する、新しい世界をつくるクリエイティビティのうちに見ていることを発見した。それはアートをつくるクリエイティビティと根を等しくするもので、その結果、ナウトピアの運動は社会運動であるのと同じくらい、社会彫刻的なアートの実践になっている。社会運動とアートの境界をいくこのナウトピアの運動を鏡にすることで、アートと社会運動双方を現状批判すると同時に、その協働の可能性を示唆し、両者のあるべきかたちを提言することができた。

研究成果の概要（英文）：In this research project I compare this spontaneous power of people to “occupy” and redefine the space with artistic creativity. Then I investigate the possibility of empowering such activism by art through case studies, such as the “(Park)ing Day”, the “Critical Mass”, the “Sidewalks for People” which I called Nowtopian movement. They have a highly decentralized, DIY character, which demands strong artistic creativity. A participatory art, empowering everybody to be an artist, will help activists explore their causes and desires more deeply, diversify their expressions, intensify their interaction with each other on every level including subconscious or contextual ones. It will result in a powerful ecosystem of people creating Public Space. This empowerment will be vital for activists to avoid a trap of fetishism, which can make them stick to a cliché easily co-opted by commercialism, or doctrinarism, resulting in a new power controlling others. Continuously being creative and explorative with the help of art, activists can not only resist but can also successfully grow out of the fetishistic way of life capitalism imposes on them.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：芸術学・芸術史・芸術一般

科研費の分科・細目：文化政策

キーワード：コミュニティー・エンパワーメント、ストリート・カルチャー、サンフランシスコ、パブリックスペース、対抗文化、草の根政治運動

## 1. 研究開始当初の背景

ドイツの芸術家ヨーゼフ・ボイスが、お金ではなく、人間のクリエイティビティこそ、経済を動かす資本だと唱え、旧マルク紙幣に「芸術＝資本」と書きこんだのは1979年。当時その言葉は、難解、あるいは夢想的に響いたと思われるが、その20年あまり経って、クリエイティビティこそ経済の推進力であるという認識が進んでいる。もちろんこの20年の間には、先進諸国を中心に産業の「脱工業化」のさらなる進展、製造から情報への産業基盤の移行、および情報のマルチメディア化が加速的に進んだ背景がある。この産業基盤の移行は、日本を含む先進諸国がくぐりつつあるもので、クリエイティブ・シティが多くの都市の未来の姿を呈しているともいえる。

ということは、放っておいても、ボイスのヴィジョンが、ある意味、世界中で実現されるということなのか？

しかし、現在進行中のこの「芸術＝資本」化を観察するにつれ明らかになるのは、これが旧態依然とした経済システム下でその進展が進んでいるために、さまざまな矛盾を抱えていることだ。1、まず、実質上の富の生み出し手は、ますます人間のクリエイティビティとなってきている（芸術＝資本）。にもかかわらず、〈貨幣＝資本〉原理で動く企業下でそれが行われていること。そのため、2、クリエイティビティが経済利害から離れ、自由に発露することができないこと。その結果、単なる一過性のムードづくりや、見慣れたものの再生産に傾く、いわゆる商業化を免れなくなっていること。その結果、3、真正なクリエイティビティを、経済利害から独立した、自由な形で発揮したいと願う人々、たとえばファインアートの制作者は、経済に参加しよ

うとすれば、自分のクリエイティビティを、製品の交換価値を上昇させるために歪曲せざるを得ないし、こうした譲歩を一切拒絶し、真正さを守ろうとすれば、経済活動から孤立せざるを得ないことだ。

また、このシステムでは、売れ筋として認められたほんのわずかなアーティストしか関与できないのが問題である。受容者の方でも、消費者という受け身の形で、しかも購買力のある限りしか芸術に参加できないのが問題である。クリエイティブ経済化の進行を受けて、芸術と産業、経済がかつてなかったほど密接に関連を強め、社会の隅々に芸術的な要素の浸透が待ち望まれているときに、（利潤原理と偶然あるいは意図的にマッチした幸運な例外を除き）ほとんどの職業芸術家がこれに参加できていない。いわんやボイスが夢見たように、すべての人々が、それぞれの職種内でクリエイティビティを発揮する芸術家になる事態から現状は程遠い。しかしこれは危急の課題である。というのも、クリエイティブ経済化が進行するうちに、フロリダも指摘するように、職業でクリエイティビティを発揮できる人々とそうでない人々との間に、経済的格差が深まっていくことが予想されるからである。

以上みたように「芸術＝資本」の現実化への格好のチャンスが到来しているながら、これを生かそうとするアクションが、芸術の側からないこと、また、旧態依然とした経済システムのまま、この事態へとさらに深く突入したときに待ち受ける危険が十分認識されていないことは深刻ではないか。そう思いながら今年の夏、サンフランシスコでコミュニティベースのNPOギャラリー利用者調査を進めているうちに目にとまったのが、大企業と制作、流通過程で結びつかず、商業的成功以外

の評価基準をめざしながら、同時に行政やメセナの支援もなかなか届かない地域の芸術活動（以下「独立系アート」と呼ぶ）を支える、主に若い人たちからなるコミュニティである。それは alternative culture community を略して alt-cult community と呼ばれているもので（以下 ACC と略）、独立系アート関係者、グローバルなネットワーク意識のもと、環境問題や社会的公正の問題に取り組む活動家、ポール・レイが「カルチュラル・クリエイティブ」と名付けた、繊細な趣味・芸術鑑識力と、環境・社会公正意識を備えた消費者たちなどからなる。その構成要素をなす個々の層は、日本も含む世界中の先進諸国に見受けられるものだが、1、それらがまとまりのある一つのコミュニティとして顕在化し、独立系アートの生産、流通、消費の自律したシステムを築きつつあること、2、盛んな交流や参加型芸術の発信によって、コミュニティ内の非芸術家のクリエイティビティ上昇に役立っていること、3、影響力の高いイベントや政治参加により実際に社会変化を生み出し、芸術に発するクリエイティビティが造形力として社会に流れ込んでいく「社会彫刻」のパルプの役割を果たしていること等において、ほかに類をみない。

## 2. 研究の目的

情報やハイテクへの産業基盤の変動とともに、クリエイティビティが産業の推進力としてますます認識されつつある。しかしこのクリエイティブ産業化の歩みは目下資本主義の利潤追求インセンティブの圧倒的支配下にあるため、1、クリエイティビティの本質が歪められ、その社会変革的な力が発揮できずにいること、2、そこでクリエイティビティを発揮できるのは、自分の創造物を利潤と合致させた一握りの人々にすぎず、その先鋭

的な担い手であるはずの芸術家のほとんどは関与できないし、ましてや、ボイスが意図したように、すべての人々がそれぞれの持ち場で発揮するクリエイティビティの総和が産業を動かし、社会を変える事態から現状は程遠い等の問題がある。本研究はこの事態を打破する道を、クリエイティビティ発揮のインセンティブを利潤や個人的成功にはなく、街づくりや政治変革に参加し、世界に違いをもたらす「公共的幸福」へと移した、リアルタイムで形成されつつあるサンフランシスコの対抗文化的コミュニティの事例に見る。これを研究することで、その独立性・先鋭性を保ちながらも、社会と連携し、時代に即した社会進化の一翼を担う芸術のあり方、クリエイティビティ一般のあり方、また進行中のクリエイティブ産業化に、より幅広い層の芸術家、および市民が協同参加するモデルを作り、広範囲へ応用可能な理論づくりをすることが本研究の課題である。

## 3. 研究の方法

(1) ACC およびそれをとりまく状況についてすでに刊行、公表された資料を読み込み、ACC の実態を歴史的、社会的コンテクストから明らかにし、その普遍性などを問う。ACC 内部での芸術の機能の実態を調べるため仮説作り、および、効果的な調査対象を限定する。(2) 渡米し、ACC コミュニティの焦点をなす「クリティカル・マス」その他のイベントや、そのたまり場になっている場所や活動に参加観察する。と同時にさまざまな立場から ACC に参加する人々、またそれをとりまく ACC 外の人々にインタビューを行う。当事者の同意を得た上で、音声、録画記録をつくる。(3) 帰国後、集めたデータを、当事者自身の関心事、知識を抽出する、エスノメトロジーの方法で分析。それをクリエイティビティ

ィの独立性、自律性の社会変革への還元という視点からまとめていく。(4) 日本で進行中の同種の現象との比較。その成果は、ACCについての私の研究意義について省察をうながすとともに、日本へのその応用可能性を考えるための材料となる。

#### 4. 研究成果

研究計画を練った時点では、サンフランシスコのACCが、どのように人々の社会参加や公共性への志向を、アートの実践や普及へつなげているかを見るつもりであった。しかし実際、現地に入ってイベント参加や当事者のインタビューを続けるにつれ、ACCは、たんに対抗文化を愛好する人々がたまり場ではなく、新しい社会のヴィジョンを共有しながら、草の根からこれを「つくる」という見地から、協働する人々からなっていることがわかってきた。それは、環境保護やパブリックスペースの奪回をめぐる社会活動のかたちをとってはいるが、何かに反対する姿勢よりも、「では自分たちはどんな世界に生きたいのか」を、いきなり実物呈示することに重きをおく。つまり声高に戦争反対を語るのはやめて、花を配り、警官が構える銃口にも花をさしていったフラワーチルドレンの平和運動の伝統は、今のサンフランシスコにも健在で、車社会を批判するより、車の場所である駐車場を車を止める代わりに緑化するために借りて緑で覆うといったパフォーマンスやインスタレーションのかたちで今も脈々と受け継がれている。一般に「直接行動」や「予示的政治」と呼び習わされているものだが、カーニバレスクな演劇性やユーモアの精神に貫かれたサンフランシスコ特有のその現れそのものを、一種の社会彫刻的なアートとしてとらえるという、研究プランの修正はなかった。

それと連動して、静的で受動的な響きのあるACCという言葉の代わりに、クリス・カールソンという現地の社会活動家であり、郷土史家が、同名の著作の中で唱えている「ナウトピア」をつくる「ナウトピアン」という呼び名を使うことにした。今、ここにあるユートピアをつくる人たちという意味である。具体的には、大量の自転車で道路をのつとる「クリティカル・マス」、パーキングスペースを一日公園に作りかえる「パーキング・デイ」、金融街でゲリラシアターを仕掛けるパントマイムグループSANE、パブリックスペースで、パンを焼いたり、機織りをして、物を手作りすることからはじまるコミュニティや経済の新しいかたちを実践するリサルス・エリオットやトラヴィス・メニノルフといったアーティストの活動などを対象にした。

そんな彼らにインタビューを重ねて発見したことは、社会を変える権力を、彼らは新しい社会を「つくる」力そのものの中に見ていることだった。このように考えることから、彼らは社会を変えるために、権力を「とる」必要は全くないと考える。あるいは社会があるべき姿にないからといって、権力者を非難したり、署名などを集めて嘆願するといった発想もない。そもそも、権力を私たちの外にある、希少で特権的なもの、外からトップダウン的に私たちに作用するものと考えていないのである。そうではなく、権力は私たちの中にある、世界をつくる力そのものなのだという意識が前提になっている。それは潜在的にはあらゆる人が、しかも無尽蔵に持つものなので、権力獲得のために競い合ったり、ましてや暴力を振るう必要など、どこにもない。したがって彼らナウトピアン社会変革のやり方は、ひたすら世界をつくることになっている。

ナウトピアの運動は、従来の社会運動と比べると次のような性質を持っている

#### (1) よろこびの政治学

魅力的で、誰しも参加したくなるような世界をつくり、パブリックスペースで実例呈示すること。そこで出来上がる世界が、既存の世界とくらべて、どちらがよろこばしく、説得的か。どちらの世界にあなたは住みたいかと問いかけることで、勢力を拡大していく。

#### (2) 自己目的性

クリティカル・マスの合言葉の一つに「デモはユートピアの手段ではなく、ユートピアそのものでなければならない」というものがあるが、ナウトピアは運動を目的達成の手段とは考えていない。この自己目的性が、運動に遊び心をもたらし、また参加者も道具化せず、かけがえのない個性をもった主体として生かすことにつながっている。

#### (3) 脱中心的、水平的

成功的なナウトピアの運動はすべて、ヒエラルヒーのない、自由で、主体的な参加が可能な構造をそなえている。それは一つには、よろこびを最大化するためでもあり、また一つには、最大のクリエイティビティを動員するためである。クリエイティブであるためには、参加者一人一人が世界をつくる主体とならなければならないからである。

(4) メッセージではなく、問いを共有する社会運動を一つにまとめるには、共通のプログラム、ゴールが必要だという風に彼らは考えない。問いを共有するだけで十分なのだ。たとえばパーキング・ディの運動は、「車社会をやめて、コミュニティと緑を増やそう！」といったゴールを共有する運動なのではなく、「車社会の後に、どんな社会がくるべきか？」という問いを共有して、一人一人が、自分が借りたパーキングスペースを舞台に、思い思いの答えを実例呈示であらわす運

動である。その結果、コンサートをしたり、ヨガクラスをしたり、瞑想をしたり、フリーの健康診断をしたり、はてまた結婚式をしたり・・・といった多様極まりのないパフォーマンスの舞台になっている。

#### (5) 「代表＝代理」任せから DIY へ

ナウトピアンは代表民主主義政治に対して懐疑的で、直接参加型民主主義の側に立っている。社会を変えるのは結局自分しかない、という気概を共有しているからである。と同時に、資本主義経済の中に溢れる商品に対しても、結局は自分の欲望を代理するものでしかない、と懐疑的である。本当に欲しいものは自分でつくるしかないと思っているからである。

ナウトピアの運動を深く探るにつれ明らかになったのは、社会を変革する力と、アートをつくるクリエイティビティが根を等しくしていることだった。新しい社会をつくる内発的権力と、クリエイティビティは、その源泉を一つにしているのである。そのことは、よくできたナウトピアの運動はすぐれたアートパフォーマンスになっているし、また本当に社会変革の実効性を持つアートは、すでにナウトピアの運動としての性質を持っていることから、見て取れる。

そこから、社会変革とアートが、互いが互いを参照し、自己批判のための鏡にできるようにすることで、制度や慣習の枷の中で、覆い隠され見失いがちの内発的権力＝クリエイティビティの源泉にしっかり根をおろせるよう、両者をふたたび再定義するという構想がうまれてきた。その成果を、社会運動とアートそれぞれの現状批判、今後のあり方の提言として、今、まとめている最中である。ナウトピアというアートと社会運動の融合体の見地から、社会変革への実効性のあるアートプロジェクトを提言、実践するところみ

については、2012年2月に私が主催したアートと社会変革についてのシンポジウムのテーマにした。地域振興と結びついた大がかりなアートイベントが、その土地に生きる人たちの文化に対して破壊的に働くことが多いこと、その土地住民のクリエイティビティを動員しながら皆で自分たちの見たい世界を描くようなアートイベントはどんなものであるべきかについて意見交換をした。また、その議論を踏まえ、その年冬に、私がサンフランシスコで事例研究中に会ったスクウォット実践者で、Streetpiaというアートイベントを主催したエリック・ライルを呼んだ対談イベントも行うことができた。そこでは、アートイベントが、地元の文化を破壊するだけでなく、地元にもともと住んでいた人たちを追い出すジェントリフィケーションの引き金をひくこともあるという、アートと生政治の関係が議論の焦点になった。北海道には、朝鮮人強制連行・強制労働問題に対して、遺骨や遺物を返還するアクションを起こしている、日本のナウトピア運動とよぶべき空知民衆史講座の運動があるが、2012年の8月には、その東アジア合同ワークショップのシンポジウムでの招待講演で、アメリカのナウトピアンについて紹介する機会にめぐまれた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

Makiko Horita :How Art Helps to Create a Public Space, The International Journal of Social, Political and Community Agendas in the Arts, 2013, Vol. 7, pp. 21-28  
査読有

〔学会発表〕(計3件)

- ① 対談 エリック・ライル×堀田真紀子、アサヒ・アート・カフェ「政治とアートとまちづくり」、コーディネーター

芹沢高志、2012年12月9日、3331 Arts Chiyoda.

- ② 堀田真紀子、芸術、文化研究・実践者の視点からみた空知民衆史講座、東アジア共同ワークショップ オープニング企画「東アジアを【共】に【生】きる ～東アジア市民社会の経験と未来」、2012年8月23日、本願寺札幌別院ホール、招待講演。
- ③ Makiko Horita :How Art Helps to Create a Public Space, International Conference on the Arts in Society 2012年7月24日 Arts and Design Academy, Liverpool, UK.
- ④ 堀田真紀子、草の根からの社会改革、シンポジウム「アートと社会変革」、2011年2月4日、北海道大学遠友学舎。

〔図書〕(計0件)

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀田 真紀子 (HORITA MAKIKO)

北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・准教授

研究者番号：90261346